

これからの領域「表現」音楽教育分野での検討 —保育者が子どもたちの表現活動の中から感性・資質・ 能力を引き出せる音楽的表現指導法習得を目的として—

Future area "Expression" Examination in the field of music education

- For the purpose of learning musical expression teaching methods that allow childcare workers to draw out their sensibilities, qualities, and abilities from their children's expression activities -

杉山真規
Maki SUGIYAMA

1. はじめに

平成30年度4月に施行され、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（以下、『要領』とする）が改訂された。

これらの『要領』の改訂した内容を保育者養成校においては、授業内容及びカリキュラムに反映させるために、改訂のポイントをよく理解しておくべきであると考えられる。

さて、これからの社会を生きる子どもたちを育てるために求められることは、幼稚園・保育所・幼保連携型こども園（以下、「保育現場」とする）が同じ目線に立ち、①保育現場類型に関わらず3歳以上児の保育を「幼児教育」として共通化すること②質の高い教育を提供することの重要性③5領域として子どもに経験してほしいことを増やす④幼児期から小学校進級時における子どもの資質や能力の継続化を見据えることが、重要であると感じる。

また、保育における「10の姿」とは、文部科学省が示す「幼児期の終了までに育ってほしい具体的な姿」のことである。5領域とは、1歳以上3歳未満児（乳児期）に経験してほしい事柄を整理したもので、「10の姿」は小学校入学前の5歳修了時までには育ってほしい姿を示す。「10の姿」は、ごく小さい時期からの積み重ねから得られるもので、保育の指導における目安であり、決して到達目標ではないことを理解しておく必要がある。そして、小学校に入っても引き続き指導を重ねていくべきことであることも忘れてはならない。保育現場において、保育者は、子どもの状況や個人差に配慮しつつ、生活や遊びの中で自然と習得していく工夫を行うことが大切なことである。「10の姿」をよく理解して、毎日の現場における実践で、子どもの健康な成長と、潜在能力を促進して行くことが保育者には求められるのではないだろうか。

「保育現場」における教育と保育は、5領域と呼ばれる「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」が設定されている。これは、小学校における教科にあたりと捉えるが、保育現場には、小学校のように決められた時間割の区分がないため、乳幼児が保育現場で生活活動を送るには、5領域を配慮しながら保育内容に取り入れることが求められる。

領域「表現」の定義は、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするのである。音楽表現に関する事項は、領域「表現」に

含むが、他の4領域とも密接な関わりがあるため、幅広く捉えることが必要である。

保育者が子どもたちと音楽表現活動を行う際、どのような保育内容が、子どもたちにとってスムーズに受け入れてもらえるのかを考えてみた。音楽において「リズム」は、根幹をなす要素である。手遊び・遊び歌・わらべうたの他に、保育者の演奏するピアノに合わせてリズムに乗り、身体を動かす音楽教育である「リトミック」は身体表現であり、領域「表現」として、リトミックは保育者が子どもたちの日常生活に取り入れ易いと考ええる。

『要領』による、感性と表現に関する領域「表現」の目指すものは、①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむことである。これらは、『要領』において、共通しているねらいであるが、リトミックの音楽教育の中に、領域「表現」の目指しているねらい①②③と共通点する要素があるため、カリキュラム編成に伴い、保育者養成校の科目である領域「表現」に、保育内容としてリトミック音楽教育についても取り入れた内容構成を思案している。

筆者の勤務する養成校には、付属の幼稚園、姉妹女子高校があり、幼稚園からは、先生のピアノ伴奏に合わせて楽しそうに歌う園児たちの音楽を楽しむ元気な歌声がよく聞こえてくる。また、付属図書館が養成校の隣りにあるが、園児たちは、毎週、先生に連れられてとても楽しそうに好きな絵本を借りにくる。幼稚園から図書館へ向かう園児達の様子を観察していると、幼稚園の門の前には、大きくて背の高い笹があり、枝には子どもたちの願い事が書かれた短冊、子どもたち手づくりの織姫様と彦星様のお飾りがたくさん飾りつけられている。天の川を見立てた網飾りが、風に吹かれてなびいているその前では、友達の書いた短冊をじっと見つめて、手でなぞりながら、書かれている文字を音読している園児・習ったばかりであろう七夕さまのうたを口ずさんでいる園児・道中歩いて歌いながらリズムに乗り手拍子や足踏みをしている園児・となりのトトロを元気に歌い、隣の子と繋いだ手を元気に大きく振りながら歩いている園児たち・その横でトトロのうたに振りをつけている園児など様々な光景がみられる。それらの姿は、領域「表現」に留まることなく、他の領域と幅広く関わりを持っており、子どもの感性の豊かさは、未知数であると日々感じる次第である。また、乳幼児期からの経験を「10の姿」に習い、小学校教育につなげていく幼小連携も大切であると考ええる。

筆者の専門分野は音楽・器楽であるが、領域「表現」という観点からみて、子どもたちにとって音楽とは、毎日保育現場で過ごす生活の中で、常にあらゆる形で関わりを持ち、必要不可欠なものであると考える。

『要領』の改訂に伴い、養成校の音楽関連科目授業内容は、領域「表現」に対応する時、どうあるべきなのかをよく思考し、幼児教育が小学校教育まで、長いスパンで見据えたつながりが持てる指導内容を目指したい。保育者養成校では、子どもの表現力と感性を音楽の持つ力によって、無限に引き伸ばせる授業内容にするには何を取り入れるべきなのか、領域「表現」(音楽)のカリキュラム編成をするにあたり、また学生たちにアンケートに協力してもらって得た結果も活用して考察する。

key words： 領域「表現」 幼児教育 カリキュラム編成 弾き歌い 音楽表現活動 幼小連携
リトミック 身体表現

2. 領域「表現」に関わる音楽関連科目の必要性

(1) 表現教育の充実に向けて

子どもの脳の発達は大人の10倍以上と言われているが、脳の特性について調べてみると、右脳はセンスや感覚に対して敏感に反応する。左脳は、倫理的な思考を取り仕切る。急速に脳が発達する大切な時期には、右脳の発達に効果がある「音楽」を取り込むことによって、音楽の楽しさを養いたい。「音楽表現活動」について、保育現場では、子どもたちの日常生活や年中行事には、必ず音楽的指導要素が必要となる。子どもたちの日常生活では、保育者による弾き歌いをする、歌の歌詞の中から四季を感じ取ったり、手遊び歌や遊び歌を通して、うたやリズムを自ら表現したり、他の領域との関わりを持ちながら、子どもたちの感性を引き出せるかどうか重要であると考えられる。

そこで、表現活動に関わる遊びとはどのようなものがあるのかを調べてみた。月刊保育とカリキュラム別冊「0から5歳児 園で人気のあそび100」（ひかりのくに2011）によると、室内遊びとして、体を動かすあそび、ちょこっとゲーム、コーナーあそび、0・1・2歳児のあそびが挙げられる。野外遊びとして、鬼ごっこゲーム、少人数OKあそび、0・1・2歳児の環境に合わせたあそび・わらべうた（ふれあいあそび&ゲーム）がある。子どもたちは、遊びの中から、表現活動を楽しみ、日々発達し成長していくのである。

(2) 養成校の立場から考察

音楽で「表現」することについて充実さを図るためには、ピアノ実技や弾き歌い技術の指導は、必須と考える。2017年大阪キリスト教短期大学紀要第57集「表現の基礎となるピアノ授業について—近畿圏の保育者養成校シラバスから本学のピアノ授業を考える—」（川畑尚子筆頭）によると、幼児が音楽を体験する環境において、その環境を与える立場の保育者が正しいリズム感を持って豊かに表現できること、ピアノ実技の授業は、技能習得だけでなく、計画性、創意工夫力、共感力、集中力、克己の力、これら5つが持つ内面的成長が育まれることを第一に考えられている。また、就職し保育現場においては、音楽活動が行える力を身につけることを目標に弾き歌いやアンサンブルの重要性が述べられている。実習・保育現場・就職試験において、学生たちには自ずとピアノ実技は求められる。2008年東京未来大学研究紀要第1号「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果—アレンジによる伴奏法を考える—」（紙屋信義・後藤みゆき）によると、ピアノは幼児教育の音楽活動になくてはならない要素であり、子どもを飽きさせない伴奏の必要性について述べている。また本学院ははじめ保育者養成校において、ピアノ実技が授業科目にある本質的な理由は、保育現場で保育者に求められることとして、ピアノや鍵盤楽器を用いたうたが子どもたちの日常生活に必要不可欠と言うナマの現場の声があるからだ。音楽・リズムを体感させることによって子どもたちの創造力や表現力を豊かに育てていくために、ピアノ実技の習得が必要である。

(3) 幼児教育の立場から考察

『要領』には、「生きる力」が掲げられている。その教育目標とされている、「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域の中でも、音楽は「表現」の分野に属されるが、「表現」の枠を超えて他の分野と関わりを持つことの重要性は、田原昌子氏（2015）の研究から理解している。

豊かな感性を育み、一人ひとりが思いを表現できて、他者とのコミュニケーション力を高めていくことが、今を生きる子どもたちには必要なのではないだろうか。

いま一度、5領域のキーワードとそれぞれのねらいを整理するため、表1にまとめる。

※「表現」における内容については、表1、下部に追記しておく。

幼児期の教育は、人生においての人格形成の基礎に関わる重要なものと考えられる。新しい小学校学習指導要領には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施」との記載がある。幼児教育の基本は、環境を通して行う教育であり、子どもたちに遊びを通じた総合的な指導を保育者が行うものであると理解する。

『要領』には、幼児教育を通して、子どもが身につけていく力として、「資質・能力」の3つの柱が示された。示されるようになった理由として、目の前の子どもの活動の良さを捉え、長期にわたる育ちへとつなぐことが可能になると同時に、保育の質を改善するための視点ともなる。乳幼児期から始まり、幼児期へそして更に、『資質・能力』は伸びていき、小学校以上の教科教育の核となるのである。その基盤を幼児期に育てるということは、小学校の先取りをすることではなく、子どもが気付き、試し、工夫し、興味を持ち、粘り強く取り組めるように援助していくことである。『資質・能力』の3つの柱については、表2にまとめておく。

領域「表現」には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」という感性と表現に関する領域に、音楽表現・造形表現・身体表現・言語表現等が含まれる。担当教員の専門分野で言うと、音楽・図工・体育・国語（言葉）になる。養成校において、表現力育成を重視した授業展開をするならば、例えば何か1つ、大きな題材を設定し、その題材を取り組む場合は、学生の表現技術の視点ではなく、あくまでも子どもの目線に立った場合を想定して進め、そこに各分野における専門性を取り入れ、活かしながら各分野において、融合性を持たせた授業展開が妥当である。5領域全体で行う授業も必要であると考えられるが、ある程度、学生たちには、各分野の専門的知識や技能の習得後ならば、他の4つの領域の融合も可能である。まずは、各分野の専門的知識や技能の基礎を学生たちに習得させ、その後に、文部科学省が求めている5領域の豊かさに対応できるような科目の導入、または、カリキュラム編成に務めるべきと考える。

表1 5領域のねらいについて

健康	人間関係	環境	言葉	表現
健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
ね ら い				
(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。	(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。	(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。	(2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。	(2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。	(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。	(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。	(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。	(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。	(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

※「表現」における内容について

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

「表現」における内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

表2 「資質・能力」の3つの柱

①知識及び技能の基礎	②思考力、判断力、表現等の基礎	③学びに向かう力、人間性等
原文： 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする	原文： 気付いたことや、できるようになったことを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする	原文： 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする
子どもは日々の活動で環境と出会い、いろいろな物や人の特徴に気付き、また、上手に扱ったり、関わったりできるようになる。気付いたり、できるようになったことは、多様な物事への対応を支える。	何かやってみたいことや作ってみたい物があると、子どもはそれを何とか実現しようとして、何度も試す。更に、少しずつできてきたところを見直し、もっと工夫するようになる。そこに頭を使う機会がある。	すてきだ、すごい、不思議、おもしろそうと子どもの心が動く。自分もやってみたい、作ってみたいと感じるようになる。目標に向かって何度も試して、粘り強く取り組む。そうすることが、子どもの頑張る力を育む。

3. ダルクローズの音楽教育について

(1) エミール・ジャック＝ダルクローズ

スイスの作曲家。リトミックの考案者と実践と普及に活躍した音楽教育家。ジュネーブの音楽学校を卒業後パリで作曲と演劇を学び、さらにウィーンの音楽学校で作曲法・和声学を学びながら音楽表現の理論的研究家の指導を受ける。1893年、ジュネーブの音楽院教授として、和声学とソルフェージュを担当した経験から、音楽教育のあり方を研究した。そして、1902年、ローザンヌの音楽学校で初めてリトミックの考え方を講演して人々の理解を得た。1905年、ジュネーブで子どもや一般の人にリトミックのレッスンを始め、同年、スイスの音楽教育会議でもリトミックの実技と講演を行い、多くの賛同者を得る。1907年には、ジュネーブ大学で、心理学の理論を学びながら、演劇家、舞踊家、演出家などの専門家と協議を重ね、協力を得て、リトミック教育の体系を考案した。その後、ヨーロッパ諸国に精力的な普及に努め、功績が認められ、多くの大学から名誉博士号を贈られた。

彼の弟子たちにより、パリ・ヘレラウ・ロンドン・ジュネーブに専門学校が設立され、音楽教育

界に大きな影響を与えた。1926年、ダルクローズによる第1回リズム国際会議が開催され、世界33ヶ国参加・39の研究発表と討論が行われた。

作曲の分野では、演劇的作品・管弦楽曲・合唱曲・室内楽曲・シャンソンなどを残し、「リズムと音楽と教育」「リトミック・芸術と教育」など、音楽教育とリトミックの考え方を発表した。

(2) 教育理念

和声学やソルフェージュの授業で、学生の拍子・リズムの変化、ニュアンスなどに対する感覚が、育っていないこと、子どもの音楽に対する状況を観察した結果、「音楽は、聴覚だけで受け止めるのではなく、手をはじめ身体のすべての部分で感じ取っている」事実を発見し、そのための教育や表現法の研究を進め、芸術表現に対する基本的な考えとして、「芸術表現の基礎はその人の思想及び感情であり、その表現手段はその人自身の身体」であり、「人間の身体こそが最大の表現物」と捉えた。

そして、そのための教育課程を「身体による自己表現は、ことば・文字・楽譜・楽器などによる表現方法の先に行われる重要な方法」であると位置付けをし、音楽と体と生活における共通な要素として、「リズム」に着眼する。

彼は、「人間は本来生命のリズムともいべき生理的、根源的なリズムに支配され、音楽を含む全ての芸術の基礎もリズムによっている。従って、その両者を統一することによって、人間の芸術的自己表現を豊かにすることが可能」であると考えた。音楽に感動し、音楽による自己表現を最も豊かにすることは、「人間の身体をオーケストラ化して、音楽に対して、打ち震えるように鳴り響く状態を作ること」と解き、そのための教育システムとして考案されたのが、「リトミック」と呼ばれる教育方法である。

(3) 子どもの音楽的能力とその発達への教育方法

「子どもの音楽的な能力は、子ども自身は、生まれながらにテンポ感とリズムの要素をもち、その根源であるリズムを基本とした教育によって、幼児に音楽的感觉を目覚めさせ、それを身体的に発達させていく」としており、全ての子どもの音楽的才能を体の筋肉の動きを通して発達させ、音楽的な表現を豊かにしていこうとした。音楽に反応して、歌ったり身体運動を行うこと（音楽+身体表現）により、注意力・集中力・思考力を伸ばし、創造性や社会性を高めることを目的としている。

(4) 日本でのリトミック教育

日本でもその歴史は長く、明治時代から多くの教育家や音楽家、演劇人、舞踏家などがヨーロッパで学び、それぞれの分野で取り入れていた。そして戦後間もなくニューヨークで学んだ板野平（いたの やすし・1928～2009年）が、国立音楽大学の専門課程において教鞭をとったことにより、日本でも本格的なリトミック教育が広まる。

現在では、音楽教室・幼児教室をはじめ、保育所・こども園・幼稚園や公共機関等の他、子どもの健全な育成に取り組む様々な分野で行われつつあり、『音楽の基礎能力を高めるだけでなく、個性・

協調性・社会性・積極性等を育む人格形成教育』として、多くの人に知られるようになった。

(5) リトミック教育の基本的な構成について

リトミック教育において、基礎的な構成である①リズム運動②ソルフェージュ③即興活動について、各内容とそれぞれの活動のねらいをまとめてみる。

①リズム運動

- ・身体的なリズムに対する感覚に目覚める学習とリズムの聴覚的理解に目覚める学習。
- ・音楽に合わせて、歩いたり走ったり、上半身や手・腕も用いて様々な表現を行う活動。
- ・保育者は、ピアノで様々な速さのテンポ・強弱・アクセント・拍子・リズムパターン・音楽的なフレーズに合わせて演奏し、子どもたちはそれに合わせて、身体表現を行う。

(活動のねらい)

上手にきれいに身体表現活動をするのではなく、活動することによって、より強くその音楽を自分自身に印象付けたり、感じとることが大切である。

様々な変化するリズムに合わせて、身体を動かすことによって、自分自身の身体を思ったようにコントロールできるようになってゆく。

②ソルフェージュ

- ・音の高さ、音の関係、音質の識別についての感覚を目覚めさせる学習で、内的聴覚を育成する。
- ・音遊び、音の聴き取り、歌うこと、記譜と読譜、歌唱。

(活動のねらい)

音を聴き取ることで、注意力や集中力を養う。

歌うことで、仲間の声と自分の声が響き合うことの楽しさや歌唱の楽しさを感じ取る。

音にドレミをつけて歌う階名唱によって、将来の音楽学習の基礎を築く。

③即興活動

- ・リズムとソルフェージュの原理を結合させ、その発展としてピアノによる音楽的な演奏表現を行うこと。
- ・子どもが自分のイメージしたことを身体の動きで表現したり、自分で考えたリズムを手で打ったり、楽器を使って自由に表現してみる、メロディーを歌う活動。

(活動のねらい)

すでに存在する音楽を歌ったり、楽器で演奏することは、模倣であり、人の真似をすることも大切な音楽学習である。しかし、本当の意味で、創造的な活動と併せて行う必要がある。

※上記①②③のメソッドには、それぞれ22項目の練習課程の設定がある。しかし、具体的な指導

内容と方法及び教材は、指導する対象者の発達段階や興味・関心に応じて創意工夫が必要であると記されている。

(6) テンポ・ダイナミックス・空間の関係

音楽理解のために、動きと音楽の重なりを体験し、より自然な音楽表現のあり方が重要となる。

表3 テンポとダイナミックスと空間の関係

テンポ (Tempo)	ダイナミックス (Dynamics)	空間 (Space)
速い	弱い	狭い
中	中	中
遅い	強い	広い

テンポが速いとダイナミックスは弱く、空間は狭い。テンポ・ダイナミックス・空間の関係性を体験するときには、重力の感覚について意識する必要がある。ダイナミックス（強弱）の違いは、筋肉の緊張の度合いによって感じ取ることができる。例えば、ゆっくりダンベルを持ち上げる場合と速く腕を動かしてダンベルを持ち上げる場合では筋肉の感覚の違いがわかるように、テンポの違いも筋肉感覚的に感じ取ることができる。

動きの体験では、呼吸も深く関連する。呼吸に伴う筋肉の動きが、音楽的な緊張や弛緩の感覚を呼び覚ましてくれる。動きや呼吸の中に、自然な音楽表現の源がある。

(7) 幼児のリトミックにおける注意点について

- ・乳児期は、心身ともに発達段階であるため、リトミック指導する場合は、一人ひとりの発達状況をよく踏まえた上で、個性ある表現を培うための内容と方法にすること。
- ・幼児期の日常的な生活の中には、全面発達を促す豊かな経験が必要である。
- ・幼児期のリトミックは、日常的な経験活動を素材にした教材によって指導し、豊かな身体表現をするための経験を積み重ねて、音楽やダンスとしての自己表現へ発展できるような内容と方法の展開が必要である。
- ・今日リトミックに関する書物が多数出版されているが、単に技術面の向上を求めたり、また、反射・反応のための訓練的な方法のみを行なってはならない。
- ・幼児の自己表現を最も豊かに培い、幼児一人ひとりの自己表現力を総合的に発達させるための内容と方法にすること。

4. 領域「表現」に音楽的表現の視点から取り入れるべき内容（総合考察）

令和3年、奈良保育学院紀要『感性と実践が豊富な保育者養成を目指して ― 中間報告から領域「表現」に授業として保育内容に取り入れるべき表現法 ―』（筆者）による調査報告内容において、学生たちの入学時ピアノ学習進度について、未経験者は、全体の約5割、初心者は約3割、経験者は約2割であった。保育現場で求められる、弾き歌いができるというレベルの学生が、入学時には僅かの学生しかいなかった。弾き歌いは、「歌う」「ピアノを弾く」を同時に行う演奏技術であって非常に複雑な技術である。「表現」として、簡単な音の強弱表現は付けられたにしても、相手に語りかけるように心を込めて歌って演奏することは、ピアノ初心者である多くの学生には困難な課題であることがわかった。

そこで、保育者養成校としては、2年間で、保育の現場でピアノ実技面で困らない保育者を送り出すためには、

1. 保育者に必要とされるレベルに沿ったピアノ指導の実施
2. 伴奏法の習得
3. 画期的で臨機応変の効いた弾き歌い方法の伝授
4. ピアノで表現する力を活用して、子どもたちの感性を引き出す（リトミック的身体表現を含む）が必要であるという結論に至った。

また、文部科学省による学習指導要項「生きる力」第2章ねらい及び内容について、表1*印以下参照。「表現」における内容については、内容の取扱いの留意点の記載がある。（下記抜粋）次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

文部科学省による留意事項(1)(2)(3)は、子どもたちの領域「表現」の充実を図るための内容である。保育者に求められることは、これまで以上に、子どもたちの感性を引き出せる指導スキルが必須だと理解する。

筆者は2年間で、保育の現場でピアノ実技面で困らない保育者育成のためには、上記二重線部分1. 2. 3. 4が必要であると述べたが、プラスαとして、子どもたちの感性や表現を豊かにすることが求められるならば、養成校では、4を更に、強化していかなければならない。学生たちには、ピアノ伴奏や弾き歌いを用いて、音楽的感性や表現力向上に目を向けたレッスンを重視する必要がある

あると思われる。

子どもたちの特性と音楽表現への繋がり方を楽曲ごとにアドバイスし、保育の現場を想定した内容を実践させることが必要になってくる。また、幼児期に様々な音楽に触れて成長することは、豊かな感性を培っていくものであるし、グローバル化に対応するため、世界の音楽やうたも取り入れたほうが良いだろう。

保育現場で、子どもたちの感性や表現力を大切に扱うことのできる保育者の育成には、まずは、学生たち自身の表現力や感性を保育内容に取り入れ、活かし、色々なあそびからバリエーションの幅を広げていけるように学生を育成することが重要と考える。

今後の課題として、授業に「表現」の枠を超えて他の領域との融合した授業形態を取り入れていかなければならないと考える。養成校の教員が、常に新しい発見や感動に導ける活動に音楽を取り入れていくためには、指導法の工夫や豊富な知識を即興的に活用できる能力を指導者自身が具有しておくことが大切である。

リトミックのねらいは、音楽の基礎能力を高めるだけでなく、個性、協調性、社会性、積極性等を育む人格形成教育であるため、音楽・リズムを活用することにより、その様々に変化するリズムに合わせて、身体を動かし、自己表現を楽しむ中から、自分自身の身体を思ったようにコントロールできるようになる要素を持っていると言われている。リトミックのねらいには、子どもが幼児教育を通して身につけていくべきこととして、『要領』10の姿、資質・能力の3本の柱と合致する共通点が見られる。

そして、一般的に「弾き歌い」は、保育や教育の実践の中で、子どもの歌唱活動を豊かにするための技術である上、子どもの更なる表現の幅を引き出すためのものである。子どもの未知なる表現力を引き出しに繋がるように、ただ単にピアノで音程を正しくとって歌うだけではない。

例えば、音の大きい・小さいを子どもたちにわかりやすく伝えるためにはどうあるべきかと考えた時に、ピアノだけで表現するのではなく、色々な楽器に触れさせ（領域「環境」）、子どもが受け入れやすい楽器であれば、太鼓を使って強く叩く・弱く叩く、音の大きさを子どもに身体を使って表現させ（領域「健康」）体感させると領域の幅が広がる。リトミックの要素にも有るように、体感して感じ取った大きい・小さいを実際に言葉の理解（領域「言葉」）に繋げることによって、子どもの5領域の幅は枠を超えて未知のものとなってゆく。

関東短期大学紀要第60集、2018、「子どもと楽しく実践できる音楽遊びー表現を広げるピアノ遊びの可能性ー」（吉田めぐ）によると、子どもの豊かな感性と表現を養うことができるような、ピアノを使った音楽遊びの必要性について述べており、具体的には、絵本にピアノの音や奏法を取り入れて活動する方法、場面に応じて効果音や効果音楽として適した音を表現する、子どもの目線で楽しく音感を育むアイデアの工夫について研究されている。非常に興味深い内容で、音価やリズムを動物の様子に喩えたり、それに合わせてピアノを用いて変化させるなど、リトミックの要素も取り入れられており、子どもの音感や豊かな音楽表現を育むための導入として、活用できる内容である。

また、領域「表現」音楽の分野は、子どもたちの感性や表現を豊かにする要素をたくさん持ち合わせているものとして童謡・わらべうたがある。日本には、四季があり、人々は季節の移り変わり

や豊かな自然の営みと共に生活してきた。そこから生まれた童謡の歌詞の中には、その様子を歌われたものが数多くあり、歌いながら自然と様子をイメージできる伝統的なうたがたくさん存在する。

子どもたちは、保育者のピアノ伴奏による弾き歌い・歌あそび・手遊び歌・わらべうたを通して、日本の四季を感じ取ったり、リズム感や強弱表現を楽しみ、花一匁のように集団遊びで用いられるうたを通じて、遊びとの結びつきから子どもたちは学び、協同性・道徳性を理解したり、社会生活の中から、少しずつ人と人とのコミュニケーションを身につけていくのである。このように、領域「表現」から、領域を超えて、他の領域との関わりを持ちながら互いに発展していくのである。

5. 今後の課題

『要領』が平成30年より法定が改訂され、全ての子どもに質の高い幼児教育が受けられるように法の整備が行われ、新しい3法令で一番重要視すべきことは、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿【①健康な心と体②自立心③協同性④道徳性・規範意識の芽生え⑤社会生活との関わり⑥思考力の芽生え⑦自然との関わり・生命尊重⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現】を小学校に引き継ぐこと。また、小学校学習指導要領の記載にあるように、保育者には、幼稚園教育の段階から、感性を育むための配慮が求められていることである。

今後、幼児教育で育まれた感性は幼小連携につなげてゆき、領域「表現」は、一人ひとりの能力を十分に発揮できるよう、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に対応していかなければならない。

幼児教育で得た表現・感性は、子どもたちが小学校「音楽科」で「音楽的な見方・考え方」をすすめる際に、「音楽に対する感性を働かせる」ための基礎となる。よって、領域「表現」は、小学校「音楽科」の基礎となることが窺える。

小学校「音楽科」の学習において、「音楽的な見方・考え方」を働かせるために必要な要素は、「感性」・「イメージ」・「感情」・「生活」・「文化」を考慮した音楽活動である。幼児教育が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながるよう、領域「表現」において、音楽表現活動では、個人の発達段階を十分に踏まえた上で、達成可能なレベルを考慮しながら進めるべきと考える。子どもが徐々にステップアップできる目標を設定し、そのステップを楽しみながら乗り越えやり遂げる内容となるよう考慮するべきである。

さて、保育者養成校では、学生たちが、領域「表現」にて音楽表現活動を実習や現場で実践する場合、どのようなシチュエーションで題材を取り入れるのか、選択した題材から音楽表現活動と他の領域との融合はあるのか、またその題材から何を伝えていきたいのか、学習目標を順序立てて思考できる能力、また、学習目標に音楽活動をスムーズに取り入れられる学生を育成していかなければならない。ピアノによる弾き歌い・体鳴楽器を使った音遊び・打楽器を使ったリズム遊び・手遊び歌など音楽的表現、身体的表現・リトミックを、その場に応じて、上手に使いこなせる保育者育成を目指したい。今後も保育現場の実践に役立つ授業内容の研究を継続して行う。

近年、少年犯罪の低年齢化・凶悪事件を驚くほどニュースでよく聞く。乳幼児期の心の発達の問題が、多方面から指摘されている中、乳幼児期から子どもの心の育ちにもっと目を向けなければな

らないと考える。

保育実践の中で、「表現遊び」の機会を多く子どもたちに提供し、感性豊かな子どもの育成に力を注ぐことは、心の発達にもつながり、これからの時代に大切なことであると考えます。よって、保育者養成校の教員は、一人一人の子ども豊かな表現を引き出し、子どもたちに適切なアシストができる保育者の養成に務めて行くべきである。

豊かな感性を養い芸術的な方法で表現することや、イメージを豊かにして創造力を培い自己表現することは、人間の一生にとって重要な意味を持っている。現代の変転が激しい情報化社会において、状況に応じて新しい対応を自ら生み出し行動できる、豊かな人格を育むことこそ、領域「表現」の目指す今後の課題である。

引用文献：

- ・ 文部科学省、2020、「幼稚園教育要項解説」、フレーベル館
- ・ 文部科学省、学習指導要領「生きる力」第2章 ねらい及び内容
- ・ 文部科学省、2018、「小学校学習指導要領 平成29告示 解説 総則編・音楽編」、東洋館出版社
- ・ 厚生労働省、保育所保育指針解説
- ・ 高尾正、1992、「幼児の音楽教育」、音楽教育研究協会
- ・ 代表 無藤隆 保育教諭養成課程研究会、2017、「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか」、萌文書林
- ・ 無藤隆、2018、「3法令すぐわかるすぐできるおたすけガイド」、ひかりのくに株式会社、p6-p26
- ・ 指導 板野平、発行人 岡本功、2016、「みんなでやろうリトミック」、ひかりのくに株式会社
- ・ 今泉明美 有村さやか、2018、「子どものための音楽表現技術 感性と実践力豊かな保育者へ」萌文書林、p124-p134、p160-p186
- ・ 板野和彦、星山麻木、2018、「ユニバーサルデザインの音楽表現」、萌文書林
- ・ 小西行郎 小西薫 志村洋子、2017、「赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育 第2巻 運動・遊び・音楽」、中央法規出版
- ・ ひかりのくに編集部、2011、「月刊 保育とカリキュラム 2011年7月号別冊附録」
- ・ 吉田めぐ、2018、関東短期大学紀要第60集、「子どもと楽しく実践できる音楽遊びー表現を広げるピアノ遊びの可能性ー」
- ・ 久保田和子 茂木夕起子、2018、関東短期大学紀要第60集、「実践を踏まえた”表現音楽”の授業内容」
- ・ 瀧信子ほか、2020、「乳幼児のための豊かな感性を育む 身体表現遊び」、株式会社ぎょうせい
- ・ 村上玲子 三島瑞穂、2017、「保育養成校における教科目 保育表現技術の捉え方と課題ー音楽担当者の立場からの考察ー」、宇部フロンティア大学人間生活科学研究紀要、53巻
- ・ 上田智佳、2016、「保育者養成校入学者のそれまでの音楽経験についての調査報告」、甲子園短期大学紀要、34巻
- ・ 川畑尚子（筆頭）、2017、「表現の基礎となるピアノ授業についてー関西圏の保育者養成校シラバスから本学のピアノ授業を考えるー」、大阪キリスト教短期大学紀要、57巻、p146-p153

- ・紙屋信義 後藤みゆき、2008、「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果」、東京未来大学研究紀要、第1号、p67-p75
- ・山内信子、持田葉子、2016、「幼少接続期における音楽表現活動の検討」、聖和短期大学紀要、第2号
- ・今井香織、2019、「幼稚園教育における音楽活動のあり方ー小学校「音楽科」への接続を手がかりとしてー」、上田女子短期大学紀要、42号、p71-p73
- ・田原昌子、2015、「子どもの表現のためのピアノ伴奏法Ⅱ」プール学院大学紀要、56号、p153-p168